

万葉集の「わが妻も画にかきとらむ暇もが」小考

井上 富蔵

万葉集巻二〇は防人歌を中心にした異色ある一卷である。防人歌には悲喜ともども、読む人の胸を打つ作が多い。集中屈指の印象深い巻である。その中に次の一首がある。

わが妻も画にかきとらむ暇もが旅行く我は見つつしのはむ

20 1 四三二七

妻を思う心情がよく出ているが、一面旅のあわたしさが想像される。防人召集命令があって、出発までにはいからの時間もなかったものようである。それに類する作品は数首見ることができる。

水鳥の発ちの急ぎに父母に物言ものはず来たにて今ぞ悔しき

20 1 四三三七

防人に発たむさわきに家の妹が業なるべきことを言はず来

ぬかも 20 1 四三六四

出発をせかされて、取るものもとりあえず用意をしたらしい。いかに官命とはいえ、一旦出発すれば、数年間は

帰還できないのに、なお父母に別離のあいさつさえ交わす暇がなかったものようで、痛ましい限りである。四三三七の歌には類歌がある。巻一四東歌の相聞の中に、水鳥の立たむよそひに妹のらに物いはず来にて思ひか

ねつも 14 1 三五二八

右の一首題詞がないので、詳細を知るを得ないが、「立たむよそひに」は何のための出発であったのか、単なる旅行への出で立ちか、どういう場合の「立たむよそひ」だったのか、その辺が知りたいところである。しかしあるいは防人としての出発ではなかったか。どうも多分にそうも感じられる。というのは普通の出発であれば、「妹のらに物いはず」ということはあり得ない。官命だからこそ即刻集合しなければならず、従って「発ちの急ぎに」ということも当然であったであろう。東歌中にも防人歌と題する五首があり、分類こそはそれに属していないが、東国人がこの作をなすほどの急ぎの旅というのは、まず

防人応召の場合と考えて然るべきもののように思われる。

四三六四の歌も「発たむさわき」に妻に十分な指示もできなかったのである。出発のあわただしさが大事な用件連絡を失なわせたのである。

召集の手続などのことは、一切不明であるが、右の数首から下命から出発までの時間はほとんどないに近かったものようである。更に妙に思われるのは次の一首である。

旅行きに行く^{あもしし}と知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ

20 四三七六

この一首では用件も告げられず呼び出され、そのまま西下したようである。準備も別離のあいさつもあったものではなく。

さて、以上出発の早急、あわたましい状況などを考えたのであるが、最初の作品もそれに類するものである。ただこの際考えて見たいのは「画にかきとらむ暇もが」である。これについて諸注を参照すると、

全注釈 わたしの妻を画に描き取るほどの暇もほし

いものだ。

注釈 我が妻をも絵に描き取る暇もあればよい。

(口訳)

妻の姿を絵に描きとらう時間もほしい。

(訓釈)

文学大系 私の妻を絵に描き取る暇が欲しい。

古義 吾が妻のすがたを、うつし画にかきとらむ

暇もがなあれかし。

以上の諸解すべて大同小異である。どの注釈書にも目新しい説明はない。しかし、考えて見るといくつかの問題点が存する。

一、「画にかき取らむ暇」であるが、細密画を描くのならばともかく、スケッチ風のものと考えてよいであろう。それならいくらの時間も必要ではなかったであろう。もっとも父母妻子にあいさつも仕事の指示もできなかったほど忙しいのに、ましてスケッチ画にしても、そんな暇はないのが当然という論も生ずるであろう。どの程度の暇があったかが問題であるが、それには何の手がかりも得ることはできない。画に書きたい欲求だけは旺盛である。

二、「画にかきとらむ」の画は紙に画くのであろうか。

その点が甚だ疑問である。何となれば、当時は紙は貴重品である。官庁や貴族などなら入手もできようが、東国人殊に庶民の若い青年などに紙の一枚でも用意があったとは到底考えられない。現に奈良京の発掘遺物として木簡が出たことは、よく報道されることである。宮中でさえ木簡である。紙は諸国からの貢物である。容易に庶民が入手できるものではない。万葉集中、

「紙」の語の用例は全くない。紙がないのであるから「書く」ということも広く行なわれていたとは限らな

現に「書く」の集中例は次の二例に過ぎない。

真島住む^{うなて}卯名手の^{もり}神社の菅の根を衣にかきつけ著せむ

子もがも

7-1-1三四四

水の上に数寄く如きわが命を妹に逢はむと誓約^{うけ}ひつる

かも

11-1-2四三三

その外、「ゑかく」という語も集中には見当らない。

さて、右の例の中、一三四四の「菅の根を衣にかきつけ」には諸説がある。

古典大系 菅の根の形を着物に書きつけて

万葉考

書は借字、搔付にて摺なり

古義

カキツケ、ヌリツケ
搔付は摺著と云むが如し

筆者は、考や古義の説に賛成する。何となれば「摺衣」というのが当時一般の風習である。摺るということが専ら行なわれていた。衣に模様を書くというよりは摺ったものである。

君がため手力疲れ織れる衣ぞ春さらばいかなる色に摺

別てば吉けむ

7-1-2八一

つき草に衣色どり摺らめどもうつるふ色といふが苦し

さ

7-1-3三三九

など、衣と摺るという関連の作は多い。「菅の根を衣にかきつけ」は実際はどんなことをするのか、不案内である。菅の根でもって衣服に直接色つけをすることなのかあるいは、菅の根から染料を取ってそれで衣服を染色するのか、もし前者とすれば、ただ根で模様とか色を書くぐらいのことでは染まるはずがない。力を込めて押しつける要がある。これが「かく」である。つまり菅の根で衣を引っ搔くようにしなければならぬであらう。「かく」は即ち「搔く」である。また染料で衣服を色づける

にしても、いわゆる摺るのであるから、相当に力を要しこすりつけるのであろう。それは衣服を強く押さえて引っかくようにこすることと思われる。ここにも掻く作業が考えられる。

右の「衣にかきつけ」は、冒頭の「画にかきとらむ暇もが」の「かき」に通ずると考える。「かき」を「掻き」と考えてこそ、いくつかの疑問点が氷解する。板などに引っ掻いて線画をしようとしたのであろう。然る時は紙の必要もない。難点の一は解決する。次に板などに引っ掻くことは可なりの時間を要する。だからこそ「暇もが」という心情発露にもなったのである。この一首は「かき」を、「掻き」と解釈してこそ心情が理解できるのである。掻きも細工刀などで板に線を描くとか、削り取って顔を浮き彫りにするなどの掻きと考える必要があるであらう。

―岡山就実短期大学教授―